

| コンセプト

Temple Atomic Catastrophes

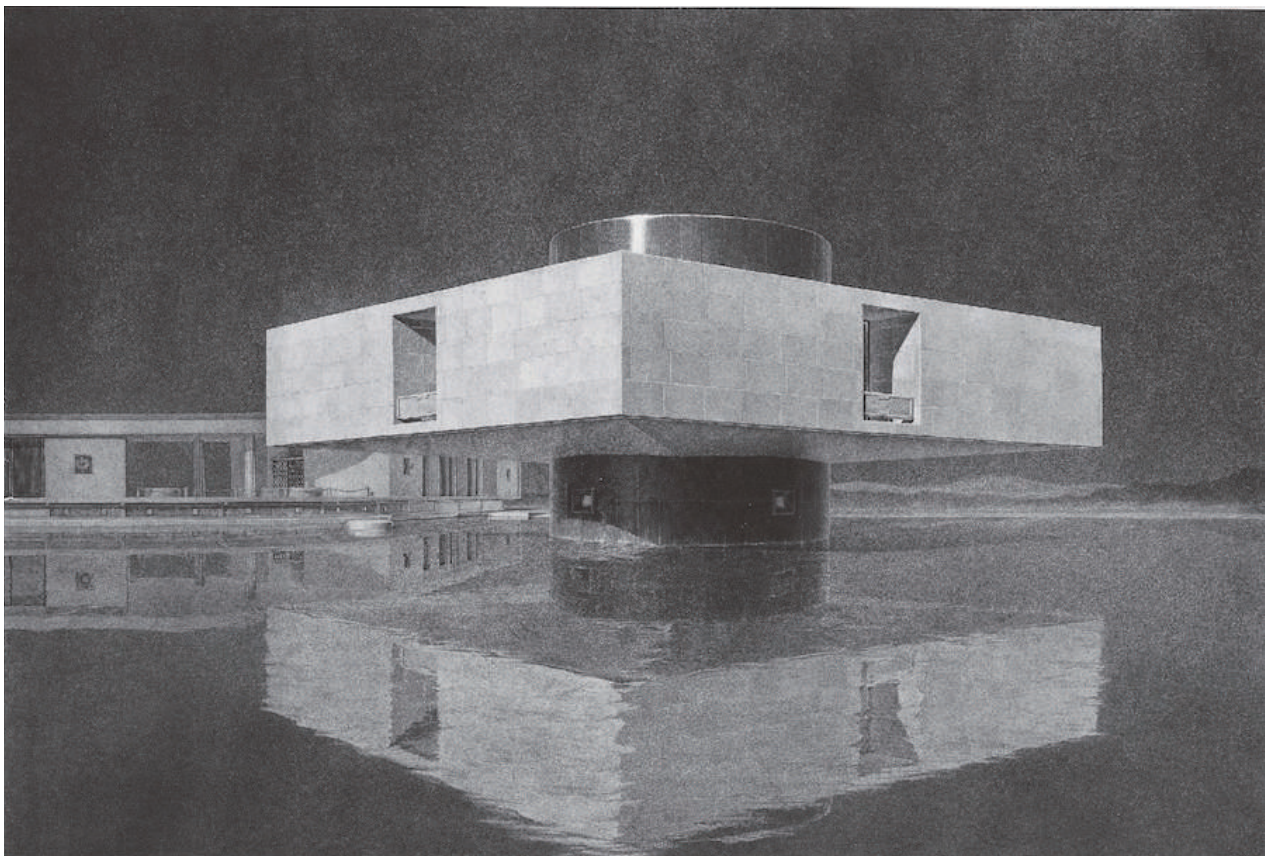
白井晟一 原爆堂

近年まで亡霊のように、人類史の地下水脈に潜んでいた「核戦争」という可能性が、今やリアリティーを持って私たちの目前に選択肢として提示されている。人類は理性によって、核兵器を使えない兵器として、その抑止力を頼みに開発を重ねてきた。しかし今、核のボタンはいつでも押すことのできるケースの中に潜み、ある独裁者の指の近くに近侍している。

核弾頭の爆発による被害状況が、核兵器使用の抑止力を持ち得た歴史は、1945年の広島、長崎への原爆投下の惨状を目の当たりにした、世界中の人々の心の中に芽生えた恐怖の体験による。その時、二度と使えない兵器としての印象を歴史に刻んだ。あれから77年の歳月が過ぎ、その当時の記憶を持ち続けた人々はほとんど旅立ってしまった。

今、この国際建築展でなすべきことは何かと考えた時、それはあの時の「閃光の記憶」を思いおこさせる、回想の展示ではないかと思う。そして建築家として真摯に被爆という記憶に関わり、その記憶を原爆堂という形で残そうとした白井晟一の「原爆堂」に焦点を当ててみたいと考えた。白井晟一は1954年、ビキニ環礁でのアメリカの核実験により、第五福竜丸が被爆した事実衝撃を受け、原爆堂を設計する。当初は丸木夫妻の「原爆図」美術館への提案として新聞紙上に発表され、広く知られるようになるが、建設には至らなかった。その丸木夫妻は広島原爆投下直後に、実家のあった広島に戻った。被爆の惨状を目の当たりにした夫妻は、救援活動をしながらも画家としてこの状況を画として記録することにした。そのリアリティーは写真では現せない程のもので、現場にいた画家の視点から描かれた現代における地獄絵図と言えるだろう。

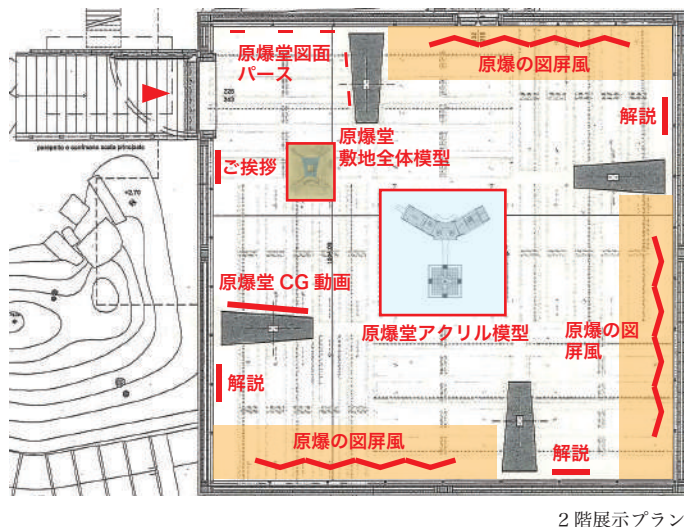
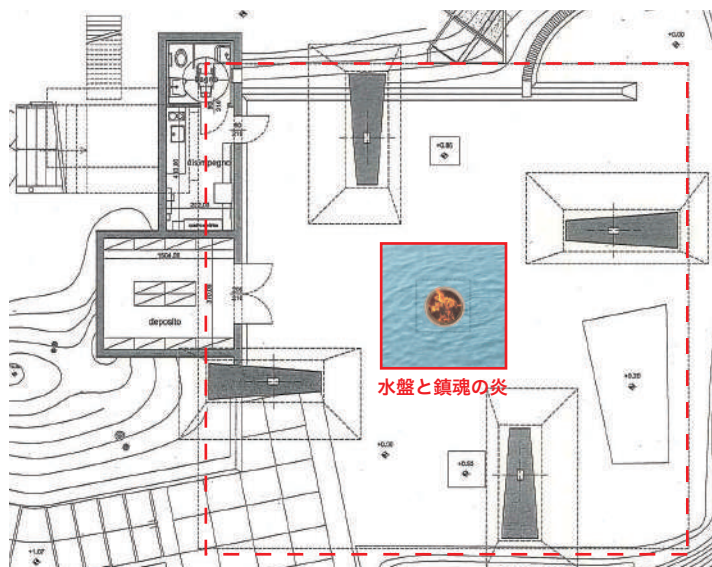
杉本博司

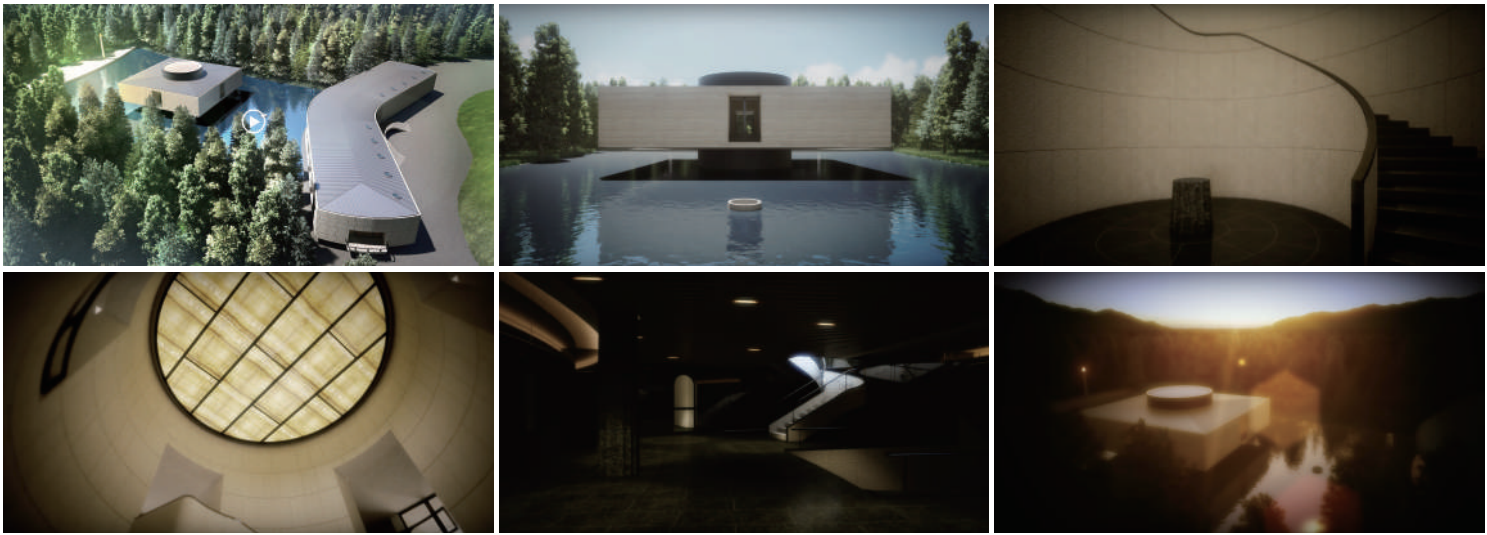


白井晟一 / 原爆堂パース

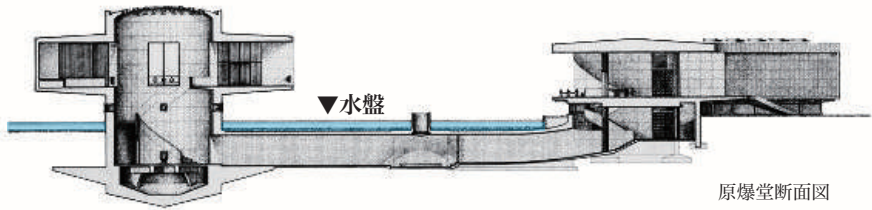
展示計画

残された原爆堂のギャラリー棟図面と吉阪隆正設計になるビエンナーレ会場図面を比べてみると、ほぼ同じサイズの矩形であることがわかる。私はこの会場を白井晟一による原爆堂のメタファーとして捉えたいと思う。このギャラリー空間に、白井晟一が想い描いた丸木夫妻の原爆図3点を掲げ、展示空間中央部には原爆堂模型が置かれる。また原爆堂の完成度の高いCG映像が2018年に竹中工務店によって製作されている。ご協力を要請したいと考えている。





原爆堂 CG 動画 約 8 分



原爆堂断面図

2F の中央に置く原爆堂の模型は、水面の高さを床から 1.5m の高さに設置し、アクリルで制作することによって水面下で繋がっている特徴的な空間構成を明快に表現する。



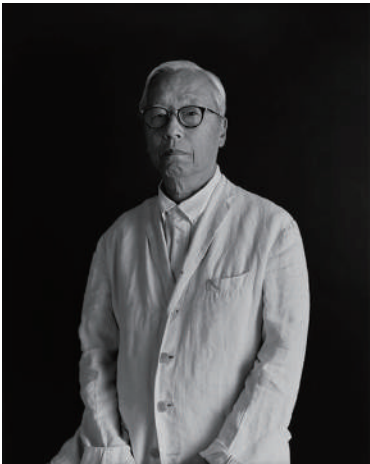
1F に設置する水盤の参考イメージ

予算概算

出展作品輸送費	往路・復路	¥9,000,000
保険料		¥1,000,000
模型製作費		¥3,000,000
会場設営費	会場設営・解体	¥6,000,000
現地管理運営費	現地コーディネーター謝金、会場運営管理費他	¥10,000,000
関係者旅費	事前調査・展示設営・撤収のための出張旅費	¥8,000,000
カタログ製作費	原稿料、翻訳料、印刷料	¥1,000,000
広報費		¥1,000,000
謝金	キュレーター、内藤廣、白井晟一研究所 / 白井昱磨、丸木美術館	¥1,000,000
合計		¥40,000,000

チーム構成

私はキュレーターとして、このテーマに関心を寄せる建築家の内藤廣氏に会場構成と展示プランをお願いした。また本企画が採用された際には、白井晟一研究所および丸木美術館より参画の内諾を得ている。



キュレーター
杉本博司



建築家 / 会場設計
内藤廣



建築家 / 出展作家
白井晟一
(白井晟一研究所：白井昱磨)



出展作家
丸木位里・丸木俊
(丸木美術館：岡村幸宣)